

平成28年度学校教育審議会（第1回）議事録

1 日 時 平成28年5月26日（木）午後1時～午後3時55分

2 場 所 杉妻会館「百合」

3 出席者数 15名

4 出席者

伊藤 信弘 委員	小沢 喜仁 委員	加藤 憲郎 委員
菅野 篤 委員	菅野 誠 委員	菊池 真弓 委員
佐治 和則 委員	澤田 精一 委員	錫谷 和子 委員
橘 文紀 委員	中山 美華 委員	早川 正也 委員
森 涼 委員	吉田 尚 委員	和合アヤ子 委員

5 資料

資料は下記①～⑤のとおり。

- ① 福島県学校教育審議会条例
- ② 福島県学校教育審議会運営要綱（案）
- ③ 福島県学校教育審議会の当面のスケジュール
- ④ 社会の変化に対応した今後の県立高等学校の在り方について（諮問）
- ⑤ 県立高等学校改革計画と県立高等学校の現状及び課題

6 開 会

委員15名の出席を得て、午後1時に開会。

7 辞令交付

教育長から出席委員一人一人に辞令が手渡された。

8 教育長あいさつ

9 職員の紹介

事務局から、教育長、政策監、教育次長、庁参事、各課長の職と氏名の紹介があった。

10 会長・副会長選出

11 会長・副会長挨拶

[会長]

前回の学校教育審議会の審議は東日本大震災およびその影響により途中で中断されてしまった。経験があるとは言え、不慣れな部分もあるので皆様の御協力をお願いしたい。学教審にあっては、今現在の教育の流れの中で見ると、福島の中にあっては復興という流れと日本の教育を変える流れの両面が存在する。また現在も97,000人が避難して

いる状況である。昨日イノベーション・コーストの検討会に参加してきた。非常に大きな産業が福島の中で育とうとしている。地域人材の定着は非常に大きなミッションである。福島県人は大変気前がいいのか、18歳まで人を育ててそれ以降都会へ人を送り出し、教育投資を回収していない結果となっている。今後は「戻ってこいよコール」も重要である。大学は他県に進学したとしても、福島の豊かさのためにも戻ってきてもらうということも必要である。私自身は山梨県出身であるが38年間東北のために人生を過ごしている形となっている。いろいろな方が一緒になって地域を作っている。是非皆さんの御意見をよろしくお願ひしたい。

【副会長】

郡山市のPTA連合会会長を務めて、今年で2年目である。子供はこの春、日大東北高校を卒業し、東京へ行ってしまった。戻ってくるように促したい。下の子が中学校に入学した。引き続き保護者の立場で参加したいと思う。私たちのPTA活動は、親と子がともに育つPTA活動を福島の未来を担う子供達のために、ということのスローガンに活動が続いている。子供だけではなく親も育たなければと考えている。その中で県立高校の在り方は重要であると考えている。郡山市内においては約3年後に義務教育学校ができるということである。いろいろなユニットの学校ができる中で、自分自身も勉強のつもりでこの会に来た。よろしくお願ひしたい。

1 2 議事録署名人の決定

1 3 審議会の運営要綱の制定について

教育総務課長が資料②により説明し、案のとおり議決された。また、幹事は教育総務課長となることが報告された。

1 4 議 事

(1) 諮問

教育長から会長に諮問が手渡された。会長からは十分な審議を行う旨の発言があった。

(2) 諮問趣旨について

教育総務課長から諮問の趣旨と背景の説明があった。続いて、高校教育課長から資料⑤によりスライドを使用して内容の説明があった。

(3) 審議・質疑

【議長】

丁寧な説明に感謝申し上げる。我々がこれから検討すべき課題についても述べられていたので、そのあたりを踏まえながら全員で意見を合わせていく必要性もある。皆さんから諮問や現状・課題を含めてそれぞれの立場から御意見を頂きたい。お一人3分以内程度で全員にお願ひしたい。

【委員】

国の方針も変わっている。自分が子供を育てた経験を踏まえて、現在自分が会社を経営する中で、若い人たちがどう考えているのかを探っていきたい。今、ゆとり教育が話題になっている。仕事をしてもらうことになる若い人たちの考え方は確かに変わってき

ているのだが、それは親の問題によるところが大きいと思う。学校としては先を見据えた上で長いスパンで若い人たちを育てていける環境を作って頂く必要がある。親としてしっかりやらねばならないことは親がしっかりと、学校でやるべきことは学校でという分担が必要であると思う。時代の要請に応えた福島型の教育をしっかり作っていく必要性と、それから会長からもあったように、福島県民は外の方々のためにお金をかけることはやめて、しっかりと福島県で若い人たちに実を結ばせるということをやっ
ていかなければならない。小さい頃よりそのような思いを育む教育が必要であろうと思う。

【議長】

私の子供二人も県外に行って帰ってきていない状況である。そのような思いも共有していきたいと思う。

【委員】

こんなに生徒数が減っていくのかと思うとショックである。地方から都会に人材を流出させて、その人達が帰ってこないことは残念。子供達には広い世界を知ってもらいたいと思っており、本屋経営の中で子供達にそのように呼びかけ続けてきた。全国でいい友人を見つけてふるさとに戻ってからもその友人とは交流し続けることが望ましい。とにかく広い視野を持って頑張ってくるように声をかけてきた。そのような若い人たちに新地のいいところ、足りないところを知ってもらった上で町作りに一緒に参画して欲しいというのが私の願いである。震災以降NPOの立ち上げなどいろいろと交流を通じて参加し、活躍をしてくれている若い人たちを頼もしいと思う。イノベーション・コースト構想の中で企業立地が進み、補助金が有効であると思う反面、若者の働き手が集まらないのではないかという心配をしている。町のHPをリニューアルしながら、「ふるさとに戻っておいでよ」という情報発信をしている。企業が浜通りの工業高校の存在をあまり知らないようなので、例えば来年度開校する小高産業技術高等学校があるという発信をしていくことが重要だ。中央から進出を考えている企業にもアピール出来る。

【議長】

仕掛け作りの重要性について述べて頂いた。

【委員】

5年前も大変であった。経験せざるを得なかった状況である反面、違った経験をすることができたという解釈も可能である。ふたば未来学園高等学校の開校など新たな取り組みにも注目している。開校1年が過ぎ、もし事務局からどのような手応えがあるのかお聞かせ願えればと思う。

本県は大学教育の場が限られている。首都圏の大学に進学する生徒が多いことは致し方ない。卒業後の進路を確保するためには環境作りも大事である。教育と産業・科学との関係を深めることも重要だ。福島は人口規模は大きい。資源も豊富である。厳しい環境は続くと思われるが、発展もさせていかねばならない。そうした中で子供の教育も考えていかなければならないと考えている。

【委員】

国の教育再編もすごいスピードで進んでいる。午前中は文科省の説明を受けてきた。生徒にどのような力をつけさせるのか福島だけでなく国も動いている。その中で特に福

島でどのような力をつけさせるのかを審議するのがこの会である。今日の国の説明では詳細な改革の姿は示されなかった。今後、どのような形で示されるか分からないが、こちらの答申が先ということもあり得る。

少子化は深刻な問題である。10クラスから5クラスに減ると、部活動・教員の仕事の持ち方も大きく変わる。4クラスから2クラスになると学校運営も大きく変わる。現行の改革計画の基準に従うとなると、小規模校やその地元にとっては気が気ではないだろう。今のままではどの学校も存続の危機となる。新しい仕組みを早く作り上げる必要がある。知恵を絞ってやっていかなければならない。

【議長】

5年間で得たものもあるが、少子化のスピードを考えると我々の審議もスピードアップして行う必要がある。

【高校教育課長】

先ほどの質問にお答えしたい。ふたば未来学園高等学校開校1年経過後の手応えについてだが、1年生においては「ふるさと創造学」における発表を行い、2年次では「未来創造探究」を行う。また海外研修においては昨年度はタイ、ベラルーシ、ドイツ、アメリカに赴き研修を行った。今年度はベラルーシとドイツ、アメリカで研修を行う予定である。

【委員】

少子化についての県全体の概要は理解できたが、もう少し各地域の特性に応じた現状を説明して頂くとありがたい。P. 22～P. 24の生徒の声は心を打つものであった。私は県内出身者の多いいわき明星大学に勤務しているが、大学生は震災の後、地域のためにとの思いを持っているようである。生徒達が今どういう状況にあり、どう思いどう感じ、将来をどう考えているのか、彼らの(生徒自身)の声、保護者の声、先生方の意識に関する調査があればよいと思う。アンケートを取ることは考えているのか。

【議長】

3年離職の現象、若者の期待しているような働き口がないという現状は確かに存在する。若者の思いを実現出来る会社の存在も必要である。若者の声による組織の変化を促しているところもあり、そのような意味でも「声」の調査は意味があると思われる。

【委員】

この10数年間いろいろな改革が実行されてきたんだなと思い出すことが多かった。これから新しい考え方をしていくので、一次・二次まとめて取り組んできて、県教委は今までの取組に対してどのような評価をしているかということは、今後を考える上で必要ではないか。

自分の住む自治体においても少子高齢化を実感している。10の小学校が4に減った。そのことに対してはいろいろな地域の意見があった。非常に苦しい思いをした。隣の金山町は川口高校の存続に向けて大変な努力をしている。これからの考え方に適切な学校規模・学科の配置・過疎中山間地域における環境や教育内容等さまざまな角度から考えなければならない。それはとても困難な課題である。規模だけを単独で考えることはできない。私自身もまだ分からない。学校は地域の中心である。環境・内容をトータルで考える必要がある。

震災は大変な経験であった。しかし「声」にあるとおり、前向きな姿勢も見られる。美里町にも避難してきた児童生徒がいたが、町の児童生徒と一緒に学習に励み、現在も交流している。そのようなことを踏まえると改革については明るい方向でも考えることができるのではないかと。地域を愛する心、思いやりなど、隠れていたもの、潜在能力のようなものが出てきたと言えるのではないかと。避難していた人たちを支えるそのような強い気持ちを感じることができた。そのような気持ちを大切にしていきたい。

【委員】

震災から5年たったが今も緊急事態である。予算的には厳しいのであろうが、教育への投資が大事である。今年から18歳が選挙権を得ることになる。高校生における主権者教育が重要。離職率は福島は全国を上回っていると聞いている。学校において働くことの意義をしっかりと教えることが重要だ。緊急時であり、産学官全地域オール福島まで、全庁的な取組で行うことが必要である。

【議長】

教育とは全ての人がかかわる必要があるが、実際には先生にお任せしてしまっている状況だ。地域も巻き込んだ教育が大事である。この会は高校を主として考えるが、義務教育との連携や高大接続等も視野に入れて考えていく必要もある。大学においては入学時のアドミッション・ポリシー、教育をする上でのカリキュラム・ポリシー、アウトプットの、社会に出すディプロマ・ポリシーがある。社会全体の流れの中での高校教育という視点で考えていきたい。

【委員】

前回の審議会においてはいろいろなタイプの高校を参観させて頂いた。自分も子育てをしてきた観点を大事にしながら、福島で高校教育を受けて良かったと思ってもらえる環境作りをすることが自分達の役割であると思っている。また今回も様々な学校を視察をさせて頂き、あるべき姿を見いだしていきたいと思う。

【委員】

今の高校3年生は震災により小学校の卒業式と中学校の入学式を経験した生徒が少ない。今の高校2年生は記録会の記録が存在しない。当時は今日のような天候(快晴)であっても長袖にマスクという格好で、外にはなるべく出ないようにという指導により過ごしてきた。保護者も随分気を遣われたと思う。不安を受け入れて学ぶという観点を生かしていただきたい。それから子供の数が少ないからといって先生を減らして頂きたい。子供の数に応じて先生の数を決めるというシステムを変えていただきたい。この子供達は太陽を奪われて育った子供達である。

今の子供の就きたい職業は公務員。安定志向の故である。保護者は離婚率も高い。家庭環境も多様化し、保護者の状況も多様化している。貧困も目に見えない形で進行している。少子高齢化し、女性も職を持ち生活スタイルが欧米化した。保護者の年齢層を見ると晩婚・早婚の二極化が激しい。そのような状況ではあるがこの会でより良い意見を出していけたらと思っている。

【議長】

やる気ある若者への支援が重要である。それを支える方策として杓子定期的に教員定数を捉えないことが重要だ。生徒のためには声を上げる必要性も出てくると思われる。

【委員】

私自身、南会津の出身で、学生時代を都会で過ごし戻ってきた。放課後子供教室で20人程度を教えている。自主性と郷土愛を育みたいと思って活動している。郷土愛とは小さい頃からの経験の積み重ねや地域との交流から生まれる。子供達がいつか戻ってここを支えてくれると信じて日々活動している。南会津の年配の方々は地元の学校を出てそこで暮らして地域を支えてきた。地域を誇りに思っている。地元の学校がなくなってしまったら心の支えがなくなってしまう。先ほどの話にもあったように、二次まとめに従っての統廃合は慎重に考えるべきだ。都市部にのみ人が流れてしまう方策は改めるべきである。中山間地域の高校への魅力ある学科の設置を考えるとともに、都市部の学校の定員を減らし、中山間地域に割り当てることを考えても良いのではないか。

【議長】

地元の大切さについて述べていただいた。私も山梨の出身ではあるが、福島で暮らしている。地域が好きで交流をもとに飛び込んでくる人がある一方で、地元でずっと暮らして協力している人も多く存在する状況もある。様々な立場が存在するということを考えながら議論していきたいと思う。

【委員】

先ほど述べられたように、県立高等学校改革についての反省が必要だと思う。ゆとり教育からの転換も何らかの反省があつてのことだと思う。その反省を一度とりまとめた上で話を進めていけば話は進めやすい。

諮問文を読むと何から何まで書いてある印象で、全てを話し合うことができるのかと思う。地域振興や人材育成など県全体の課題と重なるところもある。過疎中山間地域の高校の重要性は理解するが、過疎中山間地域の学校を残すことが全体の在り方に支障を来すのであれば、本末転倒でもある。全体的な改革のイメージを県教委より出してもらえればよい。諮問文にある4つをまとめるのは難しい。トータルとしての県教委の意見をはじめに提示してもらえれば議論もしやすい。例えば、社会の変化に対応した県立高等学校の在り方とは学力の向上策に他ならないと個人的に思う。少人数による教育を充実させ、学校の魅力化を図り発展へと繋げていく。これはたとえばの例に過ぎないが、実際にこのような方策、少人数制で学校の魅力化を図り、過疎地から脱却した自治体もある。

【議長】

網羅的であるので、アウトプットとしての制度への反映の必要性という観点から御意見を頂いた。重要な観点である。

【委員】

先ほどの話と同じく、県教委のビジョンがあつての審議なのか、この審議会を踏まえて改革案を策定するのか、よく分からない。

社会の変化は今後劇的に起きていくであろう。米デューク大学の先生によると、2011年当時の小1生が大学を卒業する時に全学生の65%は現在はない職業に就くであろうと予測している。AIの発達は我々の想像を超えている。5年後、10年後の社会の有り様を示すことのできる人はいない。生き抜いていく力、グローバルな視点をもっと盛り込んで欲しい。先々週米シリコンバレーのトップ高校を視察した。パロアルト公立高校、

私立のトップ校メンローハイスクールである。校長先生が掲げる教育目標は「学生達を現在は存在しない職業に就かせる力をつけさせること」「グローバルな視点を養うこと」と明確である。日本は大学入試もあり、柔軟なカリキュラムというのは現実的になかなか難しいが、米国は物作り教育的な生きる力を育むカリキュラムを実践している。日本も後追いながら特色あるカリキュラムによる教育を実践していく必要がある。

教育の質の向上ということに関していえば、今までの効果はどうなのだろうか。一つの尺度で話せば東大は何人合格出ているのだろうか。おそらくそれほど数は出ていないと思われる。我々は預かった生徒達の能力や個性を伸ばせているのだろうか。生徒数が10,000人減の時のトップ校の学級数はそれほど変わらない数を維持していたのではないか。山形は6クラス小規模で手厚い指導を行ってきた。福島県も思い切った対応が必要だ。都市部のトップ校の定員を減らすことは中山間地域の教育に資することにもなる。思い切った新たな発想で行う必要がある。

【議長】

明治維新から産業も大きく変化した。子供達の20年、30年後の職業のイメージはつかみにくい、そのときの生きる力とは何かを、これまでの実践から導き出していかなければならない。

【委員】

例えばいわきの児童生徒数は平成9年当時は3万9,000人、現在は2万9,000、平成40年度は1万3,000となる。子育てに関わる施策を行っていくことは非常に困難である。震災以来の教育の果たすべき役割については議論されているところである。いわきにおいては、これからの時代に対応した教育について議論してきたが、実は学校教育以外の場においても教委が中心となって生徒会サミットや3年前から「志塾」を始めている。各界のトップにおいでいただき企画力・課題解決力を育成してきた。しかし、中学校でこれだけ懸命に取り組んでいるが、高校には繋がっていない。そこで今回高校生を中心とした「志塾」として、商工会が中心となって立ち上げた「いわきアカデミア」が発足した。一部生徒のみの対象とはなるであろうが、しっかりと人材育成を行っていきたい。これから求められる力を育成出来ているのか、これから担っていけるのかと思う。これまでの改革の評価や、総合学科の学習状況について等の総括が必要であろう。この2年間でいわき市における統合は田人、三和での大規模なものであった。学校は地域の核である。二次まとめは分かり易いがこれからも同じ基準で良いのか、心配である。都市部と中山間地域が同じ基準で良いのか、それぞれの規模・実情に合った基準も必要であろう。

今年の成人式は平地区については、いわきアリオスで行われたが、成人の私語が皆無であった。今年の成人とは震災時中学3年生であった生徒である。この5年間における成長の姿の表れではないかと思われる。子供達はしっかりと変わってきている。そのことをしっかりと踏まえていかなければならない。

これまでの改革の方針は全国に合わせてきた傾向があるように思う。双葉地区教育構想やふたば未来学園高等学校などの、福島ならではの視点も重要ではないか。

【委員】

商工会議所に関わり、地域に若い人たちを定着させようと、取り組んでいるところである。離職率の高さも気になる。

先生方にも企業を訪問してもらい、また企業が学校を訪問し授業参観する。そして情

報交換を行うことで双方からも非常に良い評価を頂いている。

18歳はもう大人である。選挙権も持つことになる。地域の良さ、特徴等を理解し、自分がどう生きていくのかを高校時代にしっかり考えることが重要である。地域の良さ、特徴等を学校と地域が一体となって教えていくことが大切である。福島は今までにない経験をしてきたが、それは悲惨なことばかりとは限らない。イノベーション・コースト構想やその先、就職も研究もここ福島でもできる、働いていけるという視点・方針を示すことが必要だ。福島高校のSSH部が土湯でふぐの淡水養殖実験を行った新聞記事を目にした。ぜひそのようなものを起業化、または淡水水族館設立も考えて欲しい。子供が頑張っていることを地域でPR・応援し、地域の良さを伝えていくことが大切である。一度外に出て行ったとしても福島の良さを外に伝え、いずれ戻ってくる、そのようなワクワクする発想を期待したい。

【議長】

現行の高校教育はカリキュラムのルールに縛られすぎであると思う。やりたいことを利用した教育も必要で、地域の良さや夢をかなえることも大切だ。SSHのようにやり方を工夫出来ないか。

一通り委員の方にも話していただく中で、質問等も出された。今の段階で事務局から回答出来るものがあればお願いしたい。

【高校教育課長】

これまでの高校改革に対する評価・反省等は次回の資料としてまとめさせて頂く。また、地域の特性や生徒数、産業構造等についても資料をまとめ、生徒の意識調査を実施したものもとりまとめる。

【議長】

諮問文の4つの項目の意見について、関係性や優先順位等について検討していく必要がある。コメントいただければ。

【委員】

今出された視点とは直接関係はないが、各大学の推薦入試の枠が拡大されていると聞く。東大でも実施された。推薦入試の枠はどの程度か。

【議長】

入試が多様化しつつある。2020年度から入試の変化が予定されている。3つのポリシーという観点で大学からも提示したい。福大理工は入試はA0、推薦、一般（前・後）、私費外国人、編入学と計6回に及ぶ。

改めて4つの視点についてはどうか。高校のカリキュラムの中では子供を子供扱いしすぎであるのかも知れない。そのようなことに関連して御意見いただければと思う。

【委員】

議長の求めている観点からの発言ではないかもしれない。しかし、会社の経営では利益を出さなければならぬが、そのときに人材育成が重要となる。人は時間とお金をかけないと育たない。先生の数も減ってきているのか。山形の話も含めると人材育成に人とお金をかけることの重要性は、東大合格者が何人出ているのかということにも表れているように思う。学校教育の充実がないので福島には住まないという声も実際にあ

る。ここはお金をかけているというアピールが必要だ。私は会社経営をそのような気持ちで行っている。教育も同じではないか。教育委員会の立場ではなかなかそうも言えないかも知れないので、そこは私たちが声を上げていこうと思う。

【議長】

どれだけ投資するのかは教育をどうしていくのかということに繋がる。人と人の中で子供が育つという観点でもう少し御意見いただきたい。

【委員】

子供同士の関わりや地域の人同士の交流、あるいは農業体験をさせながら郷土愛を育む中で生きる力を育てているのかと思う。

【議長】

大学でもアクティブラーニングを行っている。関係する委員から大学教育についても少し教えていただきたい。

【委員】

大学でもアクティブラーニングを実施している。キャリア教育等も地域との連携が必要である。机上だけの学習ではなく、地域の生活課題等をさまざまな活動を通じて交流しその経験を蓄積する中で、感じ考え、その方々に役立つ方策を探る中で達成感も感じることができ、次へのステップとなる。本県の特性を生かし地域の協力を得て、できることから始めていきたい。

【議長】

家庭ではどうであろうか。

【委員】

高校生にとってはSNSが最も重要である。仮想空間から出て、米を研ぎ、味噌汁を作るなど実生活に根ざした経験が重要である。作り方だけではなく、産地はどこでなども折に触れて教えているつもりだ。子供は「てにをは」も飛んでしまい、何でもスマホで済ませてしまう。

【議長】

SNSに関していえば、私自身も家庭で取り残されている。「とと姉ちゃん」の主人公は家庭においてお父さんの役割も果たしている。主人公は自分なりの果たすべき役割を学んでいる。翻って今の若者はバーチャル空間の中でも生きており、その中で学んでいる。人間の能力・生き抜く力とは何かを今後資料を提示して頂きながら探っていきたい。それぞれのお立場で、各地域の話等を交えながら、他県の識者からも話を伺うことも必要であると思う。そのような形で福島のあるべき姿を探っていきたいと思う。今後の予定を事務局よりお願いしたい。

(4) 次回の予定について

教育総務課長より、資料③により説明があった。

15 閉 会

